

## 自然保育推進事業 活動報告書

### 1 団体名 広島大学附属幼稚園

### 2 今年度の活動概要

#### (1)環境構成に関すること

東広島市の中央に位置する本園は、園舎の裏に「たんけんの森」(陣が平山)があり、そこで子どもたちは自然を活かした遊具で遊んだり、森の中を探検したりしながら日々遊びを展開しています。森には当然、危険な生き物たちと危険でない生き物たちが住んでいます。本園では、子どもたちに自然界の多様性を受け入れられるようになってほしいと願っています。そのため、子どもたちには危険な生き物と危険でない生き物たちが自分たちの身の回りにいることを認知し、分け隔てることなくかかわっていくことができるようにしたいと考えました。そこで、ヘビやハチなどの危険な生き物たちと出会うことがないようにするための対策を講じるのではなく、様々な生きものたちと出会えるように、あえて雑木林や草むらを残すようにしました。

#### (2)特に印象的だった遊びの事例に関すること

##### 【6月下旬 ヘビがいた！(4歳児)】

子どもたちは、養護教諭からヘビやスズメバチなどの生き物と出会った時にどうしたらいいのか、保健指導の時に話を聞いている。また、日ごろの保育の中でも、保育者が子どもたちに接し方を伝えるようにしている。

6月下旬のこの日、保育室前にいた私のところに、山際で遊んでいた子どもたちが慌てて戻ってきた。どうやら遊び場近くにヘビがいたようだった。

数人の子どもたちはそれを聞き、「キャ～、

ヘビだって！」「嫌だ～！」と騒ぎ始めた。中には「どこどこ?!」と興奮して、ヘビを見に行こうとする子どももいた。そこで私は「ヘビがいたらどうするんだっけ？」と、子どもたちに言った。すると、「ヘビがいたら、先生に言う」「逃げる」と教えてもらったことを言う子どもたち。私は「そうだよ、先生にヘビがいたことを言うんだよ。でもさ、ヘビが見たいからって、そんなに大騒ぎしてヘビに近づいていいのかな？」と問いかけた。すると「だめ～！」と口々に言う。「何でダメなん？」「えっと、ヘビがビックリするから？」



【(へびって) にゆるってる】

と生き物好きな男児が答える。私は「そうなんよね、ビックリして、危ない！ってヘビが思ったら、自分を守ろうとして噛むんだよね。だから騒いだりしながら近づくのは？」と聞いてみた。すると「ヘビが嫌だ～って言う。」「ビックリして噛む！」という返事が返ってきた。「そうだよね、ヘビが嫌がるよね。じゃあ、そっと見に行ってみようか？」とその場にいた子どもたちとヘビを見にいった。

その時、別の保育者が既にヘビを捕まえていたので、実際に触る機会をもった。興味をもって近づく子どももいれば、遠巻きに見ているだけの子どものもいた。ヘビを触った子どもたちは「うわー！冷たい！」「にゅるってしてる！」と感じたことを口にする。時々ヘビが体をよじる度に、その力強さに目を丸くして驚いている子どももいた。

少ししてから、「ここは子どもたちがいっぱい遊んでいるから、ヘビは向こうの山に逃がそうね。」と捕まえた保育者が言って、子どもたちの遊び場から離れた場所にヘビを逃がした。ヘビは、フェンスの向こうの森へ這っていった。子どもたちは「ヘビさんバイバイ！」「元気でね！」と言いながら、ヘビを見送った。

#### 【9月下旬 いいやつ捕まえた！（5歳児）】

秋になり、バッタが目立つようになった。黄緑色のバッタや茶色いバッタ、太いバッタや細いバッタ・・・子どもたちは自分好みのバッタを集めたり、捕まえたバッタを見比べて違いを感じたりなど、虫とのかかわりを楽しんでいた。また、カマキリやコオロギなどのいろいろな虫にも興味を示し、それらを捕まえることも楽しんでいた。



【バッタおった！】

ある時、キリギリスが壁にしがみついていた。それを見つけた子どもたちは、「あそこにバッタおった！」と捕まえようとするが、虫の手前で一旦停止をして、「バッタの仲間？」「でも何かバッタじゃないみたい」「少し違うね」「何なんじゃろうね」「羽のところが面白い形してる」「めっちゃとびそう」「噛むんかな？」と話し始めた。私はその様子をそっと見守り、一緒に虫を見ることを楽しんでた。子どもたちは、目の前にいる虫（キリギリス）と、バッタとの違いを何となく感じながら、その虫をじっと見つめていた。そしてある子どもが捕まえて、飼育ケースに入れた。飼育ケースに入ったキリギリスを見ながら、「やっぱりバッタじゃないね・・・でも、いいやつ捕まえた！」と笑顔で言った。

またある時、イラガを見つけた子どもたちは「先生、痛いやつがおる」と報告してき

た。「痛いやつって?」と聞くと「ケムシのさ、黄緑で触ったら痛くなるやつ」と言うので、私はすぐにイラガだと分かった。子どもたちに「よく教えてくれたね。触ったら痛くなるから、触ったらいけんのんじやったよね」と言うと、子どもたちは何だか誇らしげな表情をする。私は、割り箸を子どもに渡して、直接触らないように注意しながら遊び場の近くから離すことを提案した。子どもたちはイラガをそっと箸でつまんで飼育ケースに入れ、そのイラガをじっと見つめながら、私のところに持ってきた。

### (3) その他、自然体験活動の充実に向けて取り組んだこと

#### 親子での森林保全活動

山に落ちている栗やイガ、木の枝などにポイントを付け、保護者との共催で親子で集める活動を行いました。集めたポイントは豚汁などと交換し、拾った木の枝は焚火の燃料にするなど、親子で楽しみながら森林保全に役立てます。森をきれいにしておいしいご飯をいただくという活動を通して、森を身近に感じ、大切に思う気持ちを育むことができました。



【栗の枝などを集めるポイントカード】



【お父さん方による森の環境整備】